

## 第3章 キャリア移行の実態

## 第1節 目 的

本章では、プロサッカー選手のキャリア移行の実態を明らかにする。

まず、フロント側の立場と現役プロ選手の立場から、移籍や引退の実態を明らかにし、次に、現役プロサッカー選手の移籍に関連して生起する問題を明らかにする。そして、キャリア移行を体験した元プロサッカー選手の事例を通じて、彼らがキャリア移行に伴って体験する問題にどのように直面しているのかを検討する。

ちなみに、ここで捉えるキャリア移行 (career transition) とは、プロサッカー選手が移籍をして他のチームで競技生活を続けたり、競技引退をして新たな社会生活に入ったりするといった生活構造の転換を指している。

## 第2節 方法

### 1 対象

Jリーグ（日本プロサッカーリーグ）及びJFL（Jリーグの下部組織である日本フットボールリーグ）に所属する各チーム（27チーム）のフロント（強化担当者）、及び現役プロサッカー選手（202名）と元プロサッカー選手（3名）を対象とした（資料1・2: 本文 p. 245-254）。

### 2 調査内容

Jリーグ（17チーム）及びJFL（10チーム）に所属する各チームのフロント（強化担当者）に対して、平成5年度から8年度までの4シーズン中に、自チームから移籍した選手（「移籍に関する調査」；資料3: 本文 p.255）と引退した選手（「引退に関する調査」；資料4: 本文 p.256）についての実態調査を実施した。調査依頼の段階で調査実施の快諾を得たのは、Jリーグ所属の17チーム中13チームであった。調査実施資料が回収されたのは、8チームである（回収率：34.8%）。

「サッカー選手のキャリア移行に関する調査」は、Jリーグ及びJFLに所属するチーム中、11チーム（J：7チーム、JFL：4チーム）に所属するプロサッカー選手に対して実施された（資料5: 本文 p. 257）。対象となったプロサッカー選手の内訳はJ：133名、JFL：69名であり、平均年齢は23.5（18-33）才、既婚者45名に対して未婚者は148名（うち9名は不明）であった。競技継続平均14.9（9-24）年、現在所属しているチームには平均2.6（1-11）年間所属していた。

また、引退した元プロサッカー選手に対してはインタビュー調査（資料6: 本文 p. 264）を実施した。インタビューは、移籍と引退に関連し

たエピソードを中心に抽出し、それについての当時の感情や現在での捉え方などについて詳しく尋ねている。

### 第3節 結果と考察

#### 1 キャリア移行の実態

以下では、各チームのフロントから得られた資料を基に、1) キャリア移行の推移、2) 移籍の実態、3) 引退の実態、などについて明らかにし、現役プロサッカー選手から得られた資料を基に、4) 現役プロサッカー選手の移籍体験、5) 移籍のイメージ、6) 移籍に伴う問題、などについて考察する。

#### 1) キャリア移行の推移

11 チームの平成5-8年度シーズンのキャリア移行の変遷を図3-1に示す。5年度シーズンは25名の移籍者と20名の引退者が、6年度シーズンは44名の移籍者と18名の引退者が、7年度シーズンは60名の移籍者と21名の引退者が、8年度シーズンは49名の移籍者と19名の引退者が、それぞれ確認された。また、4シーズンを通じての各チームのキャリア移行について平均を求めたところ、移籍が22.5名、引退が9.8名であった。各チームから移籍していったプロサッカー選手は平均24.5(18-39)歳であり、引退していった選手は平均25.3(19-38)歳であった。つまり、4シーズンを通して、各チームは、約20名前後の移籍者を、約10名前後の引退者を出していることになる。平成7年度に、キャリア移行のピークを迎えているが、その後に下降していくとは言い難い。こういったキャリア移行を体験するプロサッカー選手はどのような理由から、移籍や引退をしているのであろうか。

#### 2) 移籍の実態

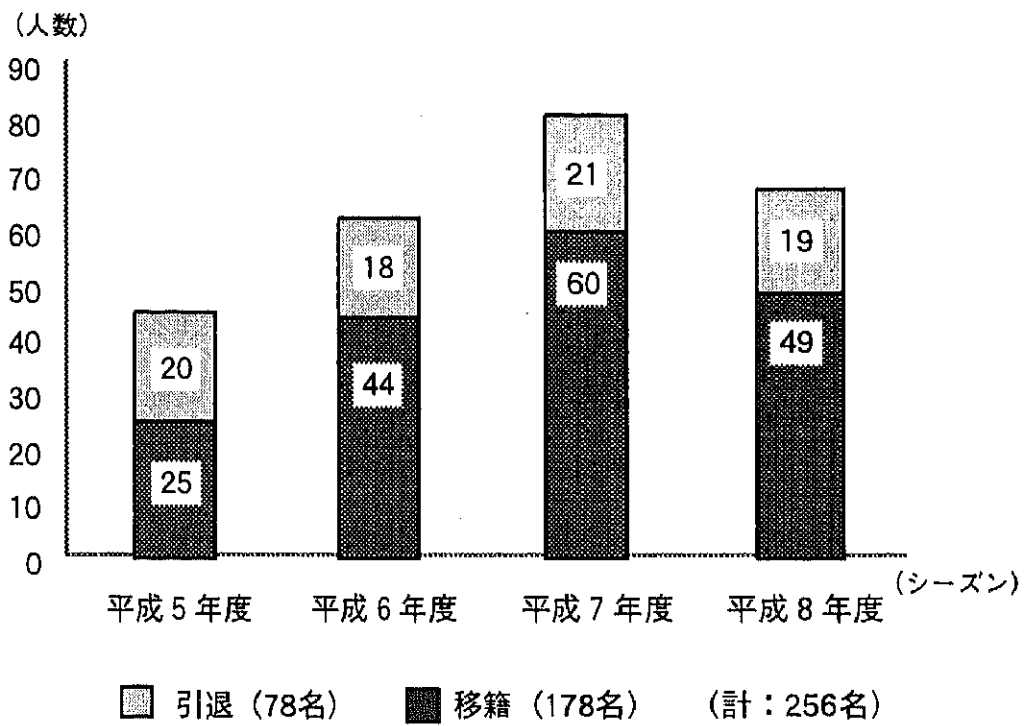


図3-1：4シーズンにおけるキャリア移行の推移

移籍の実態を表 3-1 に示した。ここではフロント側の立場から、移籍時の選手地位と移籍の理由との関係について結果をまとめた。

$\chi^2$  検定の結果、移籍時に「レギュラーで主力であった選手」は「チーム方針との不一致」や「選手補強による影響」を移籍の理由として多く挙げており、おおよそ納得して移籍していた。また、多くの場合、海外のチームに移籍し、更なる競技力向上のための機会を得ているといえる。一方、移籍時に「レギュラーでありながら主力ではない選手」は、Jリーグの他のチームに移籍する者が多く、彼らが移籍の希望を持っていることについてフロント側もおおよそ予測ができていた。「レギュラーでなかった選手」は、「チーム方針との不一致」や「新たな選手補強」を理由として多く挙げていた。彼らは、JFLやアマチュアのチームへ移籍した者が多く、概して納得した形で移籍しており、彼らに移籍の希望があることをフロント側もおおよそ予測していたことが確認された。

このような結果から、移籍については、レギュラーでなかった者は、新たな選手補強の影響を受けて、格下のチーム（例えば、JからJFLやアマチュア）に移籍することが多く、そのことにおおよそ満足していたことが分かる。一方、レギュラーで、主力の者は海外のチームへ、主力ではなかった者はJリーグの他のチームに、それぞれ移籍している者が多く、そのことにほとんど納得していたことがうかがえる。つまり、チームに貢献した者は、高い競技水準のチームに移籍することができる一方で、チームに貢献できなかった者は、降格移籍を体験しているといった構図が、ここでは明らかとなった。

### 3) 引退の実態

引退の実態を表 3-2 に示した。ここでは、フロント側の立場から、

表 3-1：移籍の実態

	移籍時の選手地位			TOTAL n = 178
	レギュラーで主力 n = 19	レギュラーで主力でない n = 27	レギュラーでない n = 132	
<b>&lt;理由&gt; **</b>				
競技力低下	1	2	2 *	5
チーム方針不一致	9 ***	6	22 **	37
選手補強の影響	7 **	15	85 **	27
その他	2	4	23	29
<b>&lt;移籍先&gt; ***</b>				
Jリーグ	5	11 **	26 **	42
JFL	3 **	11	61 *	75
アマチュア	0 **	2	40 ***	42
海外	11 ***	3	5 ***	19
<b>&lt;納得の程度&gt; ***</b>				
全く納得	10	15	81	106
少し納得	3	8	32	43
納得していない	5 ***	1	3 ***	12
わからない	1	3	13	17
<b>&lt;移籍の予期&gt; **</b>				
かなり前から可	7	7	56	70
直前には可	12	16	73	101
全く不可	0	4 ***	2 ***	6
わからない	0	0	1	1

\*\*\* p&lt;.01 \*\*p&lt;.05 \*p&lt;.10



表3-2：引退の実態

	引退時の選手地位			TOTAL n=78
	レギュラーで主力 n=10	レギュラーで主力でない n=13	レギュラーでない n=55	
<理由> ***				
競技力低下	7 ***	2	9 **	18
チーム方針不一致	1	5 **	7	13
選手補強の影響	1 ***	5	32 ***	38
その他	1	1	7	9
<現在> ***				
指導者	5	5	13 *	23
指導者以外の仕事	5	3	15	23
消息不明	0 ***	5	27 **	32
<納得の程度> **				
全く納得	8 ***	3	22	33
少し納得	2	4	16	22
納得していない	0	5 ***	5	10
わからない	0	1	12 *	13
<引退の希望> **				
希望していた	7 ***	1 ***	25	33
希望していなかった	3	12	25	40
わからない	0	0	5	5

\*\*\* p&lt;.01 \*\*p&lt;.05 \*p&lt;.10

引退時の選手地位と引退の理由の関係について結果をまとめた。

$\chi^2$  検定の結果、引退時に「レギュラーで主力であった選手」の多くは競技力低下を理由として挙げており、自らの希望で、おおよそ納得した上での引退であったことがうかがえる。また、「レギュラーでありながら主力ではない選手」は、「チームの方針の不一致」を理由として挙げている者が多く、自らが希望してはいるものの、納得した形での引退ではない場合が多い。「レギュラーでなかった選手」は、「新たな選手補強」を理由として挙げている者が多く、引退後に指導者となっている者や消息が把握できていない場合が多いという結果が得られた。

このような結果から、引退については、引退時の選手地位が低い者ほど多く、その消息をフロント側が把握している場合が少ない。一方、引退時の選手地位が高い者は、自らの希望で、おおよそ満足して引退を迎えていることが確認された。つまり、引退した者には、チームへの貢献度が低い者が多く、望むと望まざるに関わらず、引退を迎えており、そのことには満足していたことがうかがえる。一方、引退時にチームへの貢献度が高い者は、自らの希望から満足した形で引退を迎えていることが確認された。

次に、現役プロサッカー選手を対象として行った質問紙調査から得られた結果をまとめた。

#### 4) 現役プロサッカー選手の移籍体験

現役プロサッカー選手の移籍体験について分類したものを図 3-2 に示した。ここでは、調査対象者となった 202 名のうち、移籍体験者は 52 名 (25.7%)、移籍未体験者は 150 名 (74.3%) であったことが認められた。次に、移籍を体験した者について以下のような 4 つのカテゴリー

に分類を行った。JFL→Jという昇格移籍を体験した7名(3.5%)を昇格移籍群、J→JFLやJ→アマチュアという降格移籍を体験した23名(11.4%)を降格移籍群、J→JFL→Jという移籍体験を有する6名(3.0%)を昇・降格移籍群、J→Jという移籍体験を有する16名(7.9%)を同格移籍群とした。

ここでは、おおよそ4分の1の選手が移籍を体験しており、移籍体験者(平均年齢26.1歳)は未体験者(平均年齢22.6歳)よりも年長であったことが認められた。つまり、年長者になればなるほど、移籍を体験するプロサッカー選手が多いといえる。

また、移籍体験者の多くが「降格移籍」を体験している一方で、「昇格移籍」や「同格移籍」を果たしている選手は調査対象者全体の3.0%に相当していた。つまり、プロサッカー選手にとって、JFLチームからJチームへ、また、Jチームから他のJチームへ移籍することが、困難な状況にあることも予測できる。

## 5) 移籍のイメージ

次に、移籍をどのように捉えているのかといった問題を捉えるために、移籍のイメージについてのSCT(Sentence Complete Test:文章完成法:「私にとって移籍は...」)を実施した結果をまとめた。そこでは、「新しいスタートである」や「チャンスである」など、自分にとって歓迎すべき好ましいものであると肯定的に捉えているものを positive, 「辛いことである」や「考えたくない」など、自我を脅かすような否定的な意味合いを持っているものを negative, 「考えられない」や「仕方がないこと」など、肯定的意味も否定的意味も持っていないものは neutral, そして、「良いことでもあり、悪いことでもある」や「終わ

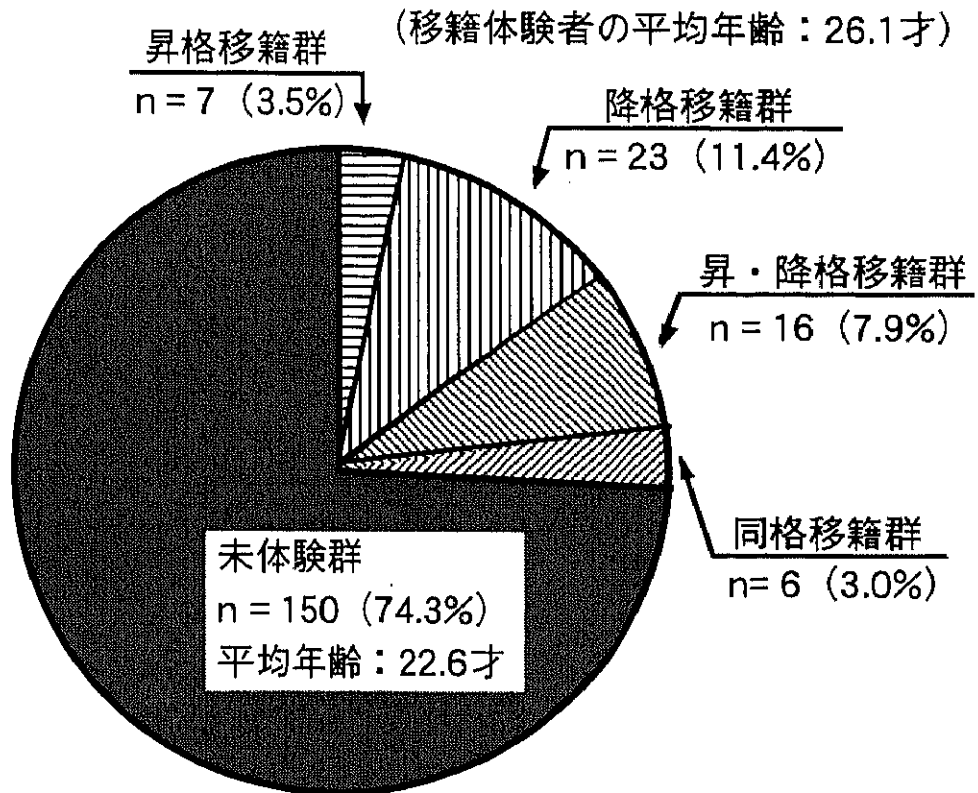


図 3-2：調査対象者の移籍体験

りでもあるが、始まりでもある」など、肯定的な意味合いと否定的な意味合いが共存している場合を ambivalent と、4つのカテゴリーに分類した。

これらの内容を、移籍体験者と未体験者で比較するために、 $\chi^2$  検定を行ったが、有意な差は認められなかった。しかしながら、プロサッカー選手にとって移籍は、概して肯定的なイメージで捉えられていることが確認できた。また、このように移籍体験者の大半が移籍を肯定的に捉えている一方で、降格移籍群においては、移籍のイメージにばらつきが認められた（図 3-3）。

## 6) 移籍に伴う問題

次に、これまでに得られた結果を考慮して、「その他の移籍体験群に比べて、降格移籍群が特異な体験を有しているのではないか」と仮定し、以下のような分析を行った。

移籍体験者のうち、降格移籍群と降格移籍群以外とを比較したところ（図 3-4）、引退後の生活に対する不安の内容において有意な結果が認められた（ $\chi^2(2) = 11.2, p < .01$ ）。そこでは、降格移籍群以外の移籍体験者の大半は、引退後の生活で最も気がかりなこととして、仕事や生活、経済力の安定についての不安を挙げていることが確認された。一方、それに対して降格移籍群は、「考えられない」や「わからない」などと回答する者が多く（1%水準で有意）、次いで仕事や生活、経済力の安定への不安を挙げるのが認められた。つまり、降格移籍は、「プロサッカー選手である自分」を維持できるという意味では概して肯定的なイメージである一方、引退後の生活についての見通しを阻害してしまう恐れがあると推測された。

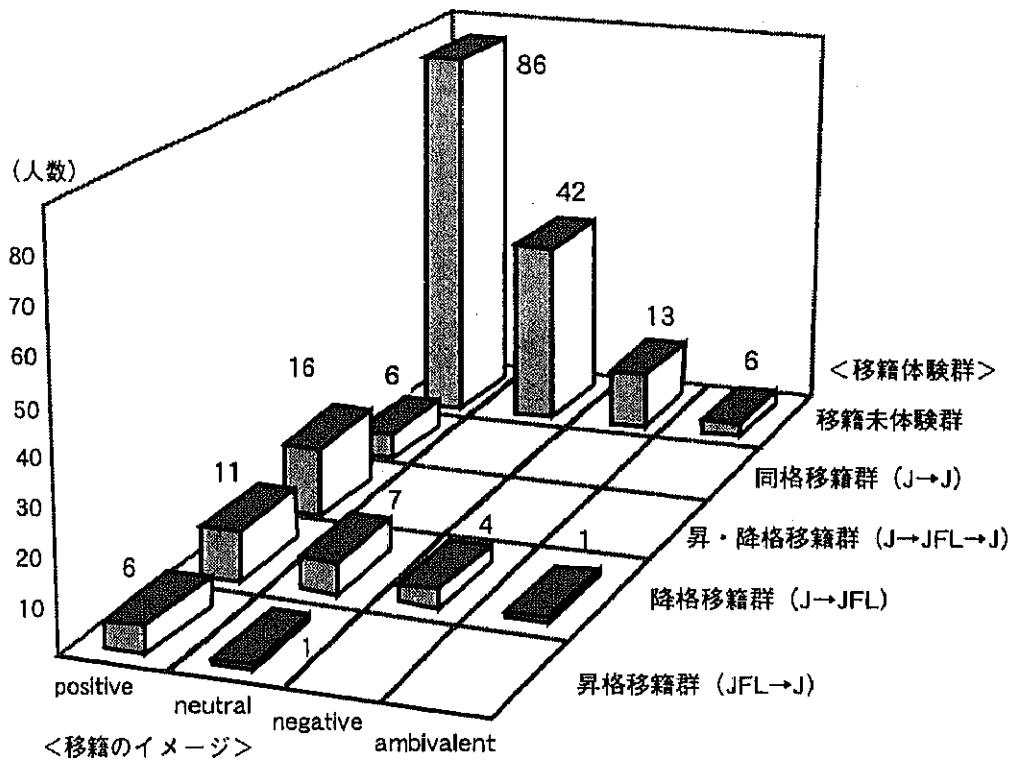


図3-3：移籍体験群別の移籍のイメージ

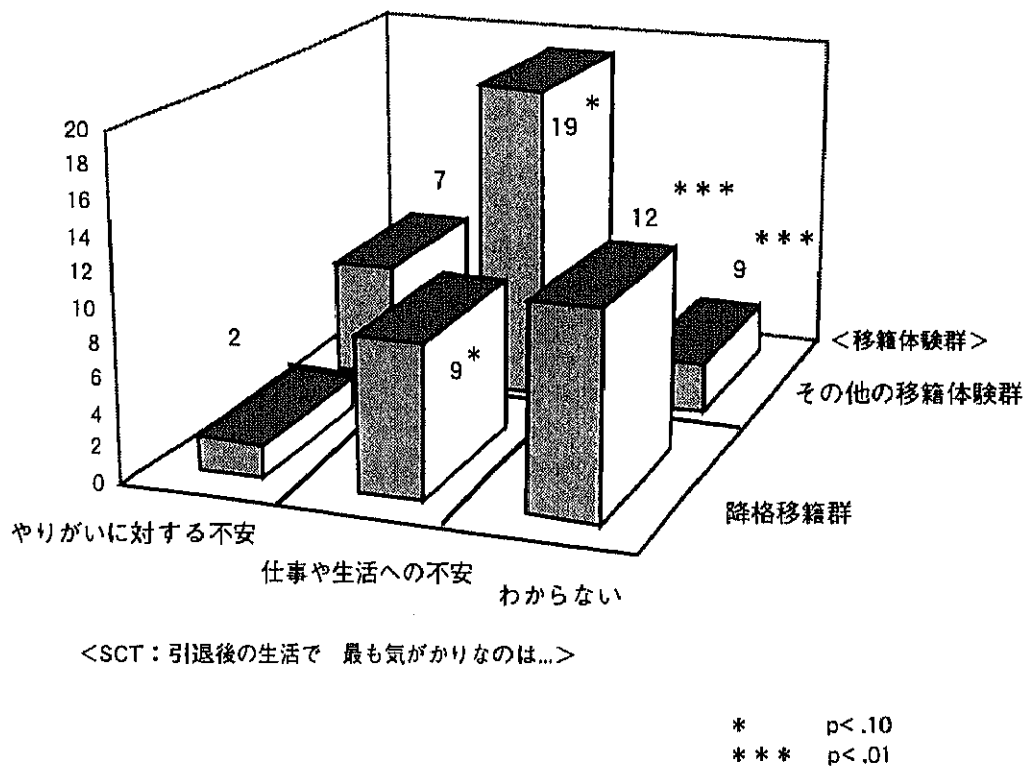


図3-4：移籍体験者における引退後の不安

さらに、降格移籍体験が引退後に備えてどのような状況にあるのかについて  $\chi^2$  検定を行ったところ (図 3-5), 有意な差が認められ ( $\chi^2(2) = 6.54, p < .05$ ), 残差分析の結果, 以下のような点が明らかとなった。降格移籍群は, その他の移籍体体験群に比べて, 引退後の備えについて漠然と考えている者が少なく (5%水準で有意), 「今を精一杯がんばるだけ」や「サッカーをより一層勉強する」など, 現状に傾倒している者も多いことが認められた。つまり, 「降格移籍は, 移籍後の状況への傾倒を余儀なくし, その後の見通しを立てにくくさせている」といえる。

これらの現役選手に対する調査結果をまとめると, 移籍体験はプロ競技者にとって概して肯定的な意味合いを持っているが, 特に, その中でも降格移籍は, 移籍後の状況に対して傾倒することを余儀なくされ, 引退後の生活の見通しを抑制してしまう恐れがあることが明らかとなった。

上記の結果は, 各チームのフロントと各チームに所属する現役プロサッカー選手からの2側面から得られた資料を分析した結果であり, 両者を直接比較することできない。また, 本研究で得られた資料からは, 移籍体験者と未体験者との間に明白な差異を認めることはできなかった。

「アイデンティティ再体制化」の立場からすると, プロサッカー選手にとっての移籍体験は, いずれ必ず迎えることになる「競技引退」に対して, 何らかの準備性を帯びた体験が含まれると予測される。そこで, 降格移籍体験者が, 移籍後の状況に傾倒し, 引退後の生活に対する見通しを持つことが困難になってしまう嫌いが確認されたことについては, 更なる検討が必要であると考えられる。なぜならば, 引退に伴う「新たな自分探し」といった課題は, 予め引退を予期し, 見通しをもって早期に次の生活の準備を始めることによって促されると予測されるからである。次節では, 上述のような疑問について3事例を通じて検討する。



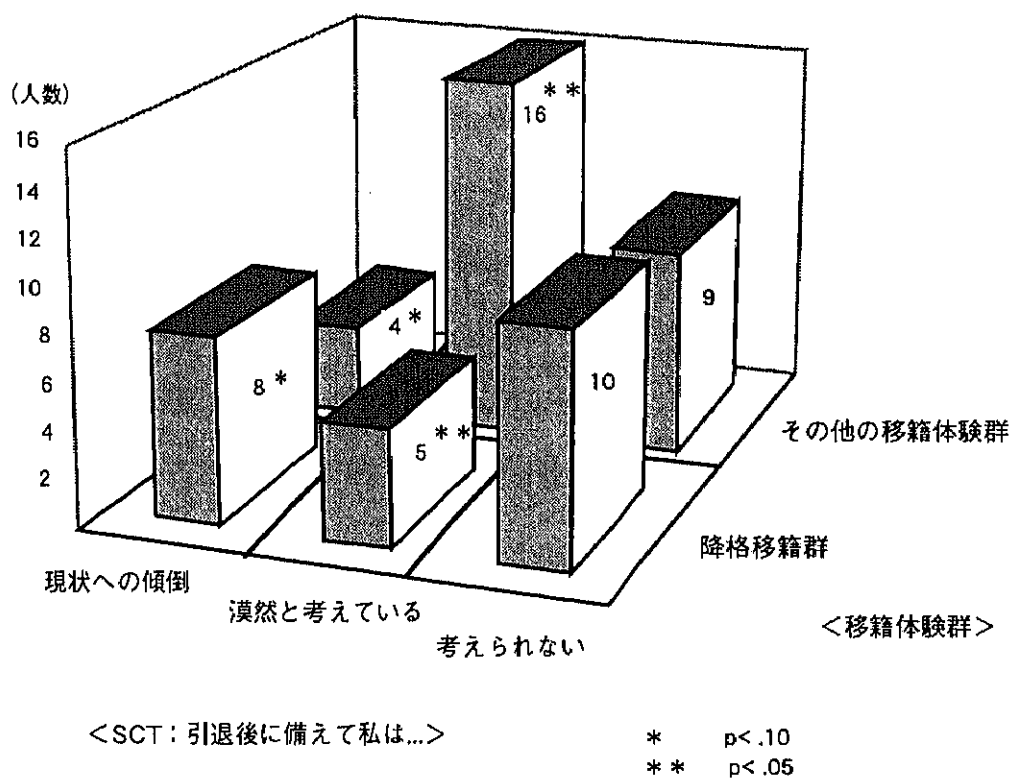


図3-5：移籍体験者における引退後の展望

## 第4節 キャリア移行を経験したアスリートの事例

### 1 事例提示

以下では、移籍体験を有する元Jリーガーの3事例を紹介する。彼らは、Jリーグに所属するチーム（以下、「Jチーム」とする）からJリーグの下部組織であるJFLに所属するチーム（以下、「JFLチーム」とする）やJFLの下部組織である地方リーグに所属するアマチュアチーム（以下、「地域チーム」とする）への降格移籍を体験した後、競技引退を迎え、調査時点では、新たな社会生活を営んでいた。事例提示については、面接協力者の了承を得ているが、その個人が同定されない程度に付帯情報に若干修正を加えている。

#### 1) 「身の振り方」を考えている元Jリーガー

事例A：男性・29歳・未婚・14年間競技継続・引退後1年経過・大手メーカー営業勤務。

Aは、JチームからJFLチームへの移籍を体験し、その後、度重なる怪我が原因で引退を迎えた。現在は、大手メーカーの営業部に在籍している。

小学生の頃は「プロ野球選手になりたい...」（以下“...”は中略を意味する）という希望から野球部に所属していた。小学6年生の頃、友達の誘いからサッカーを始めたが、当初は「遊び程度でやっていた...」と、それほど入れ込んではいなかったようである。しかし、小柄な体格のためか、当時、野球ではなかなか活躍できないでいた。「野球じゃ目立たない...おもしろくない」と思い立ち、心機一転、野球を断念し、中学2年からサッカー部へ転向した。この頃からサッカーへの取り組みを本格

化していく。「小柄で...“すばしっこい”ことが僕の特徴...サッカーの方が自分に合っていたなあ...」と当時を振り返る。そして、高校進学も、いわゆるサッカー名門校の門を叩いた。

高校2年生のある日、実業団チームの練習に参加する機会を得た。憧れの日本代表選手がたくさんいるチームで、「どこまで通用するかな...」と思って全力でプレイしたところ、スタッフの目に止まることとなった。「うまいねえ...プロになれるぞ」と冗談混じりに言われた一言が何よりも嬉しかった。それからは「サッカー一筋の生活」を送ったという。

実のところ、中学、高校では、サッカー選手として全国大会レベルでの活躍はない。そのため、「将来サッカーを続けていくのは無理だなと思っていた...」と、サッカー選手としての自分の将来を不安に思うことがしばしばあったという。高校卒業と同時に、実業団チームへの入団を勧められたこともあったが、「学歴が大事...サッカーできなくなったときの保証になるから...」と大学進学を志望した。

家族は、両親に兄が1人の4人構成で、「兄はインテリで...僕は平凡...」という。両親は共に高校の教員であり、「2人とも僕の考えと少し違って...見当違いのところがあった...」「サッカーを続けることに決して協力的であったとは言えない」としている。Aが「プロ選手になりたい...」という夢を語ると、「サッカーじゃ飯は食えない...」と揃って猛反対を受けたという。「グラウンドに一度も見に来たこともないですからね...頭が固いつていうか...とにかく、ああいう大人にはなりたくないですね...」と2人を批判する。大学卒業後の進路をあれこれ考えるようになった大学4年の夏のある日、Jチームから入団のオファーを受けた。「若いうちにしかできないことだから...プロでダメなら...それから、どこかの会社に入ればいいのか...」と考えていたAは、両親の反対を

押し切って、プロ選手としての契約を果たした。

こうして大学卒業と同時にJチームに入団したが、2年後、JFLチームに移籍をしている。Jチームでは、常に優勝戦線に登り詰めていたが、それとは裏腹に、「これでもかっていうくらい怪我が続いてしまって...」と、Aの活躍できる出番はほとんど皆無に等しかった。そのために移籍することをコーチから勧められたときは、「次のチームで活躍するチャンス」と至極納得したという。「怪我もあったし...同じポジションに日本代表選手がいて...無理だなと思っていましたから...」と、新天地に希望を託し、移籍を快諾している。

しかし、移籍後は、「スポーツ選手が一番やっちゃダメなことばかり... やっちゃいました...」と、左足首の捻挫にはじまり、右手首の複雑骨折、右膝の前十字靭帯断裂と、立て続けに怪我を繰り返した。移籍後は「グラウンドにいる時間よりも、リハビリと病院で過ごす時間の方が遙かに多かった...何かが足りなかった...」と振り返っていた。結局、5年の間プロ選手としての契約を結んだが、「最初の1年しか活躍できなかった... その後は怪我ばかりで試合に出る機会が減った...最後の1年間は、ほとんど試合に出てないんじゃないかな...」としていた。

このことから移籍後3年目のシーズン終了に伴って、戦力外扱いとなる。その時、怪我を懸念したスタッフから引退勧告を受けた。一方、他のチームメイトからは他のチームに移ることも勧められた。「もう少し続けられるんじゃないかな...と思うこともあったんですけど...あまりにも怪我が続いたんで...」「チームからクビと言われた時、格下のチームに移ることも考えた...」が、怪我への不安を拭い去ることができず、競技継続を断念する道を選んだ。その時、「今更サラリーマンになるのも...」と思うこともあったが、サッカー関連の仕事に就くことを敢えて

拒んだ。「サッカーはもういいかなって...」思い、Aは「その後の人生を棒に振るわけにもいかないから...」と決意して「普通のサラリーマンになる...」ことを選んだ。その時の引退を「プロ選手としての自分がどこかへ行ってしまって...新しい自分が現れた...」と表現する。「幸運でもあった...」チームから JFL チームに移って...世界的に有名な選手たちとも大観衆の中で一緒にプレイできた...すごく満足している...」とプロサッカー選手としての自分の取り組みに満足し、引退を迎えたようだ。

引退後は、大手メーカーに就職を果たした。「サッカー関連ではない職に就きたくて...準備はしていましたから...」と、実は、怪我ばかりしていた自分の行く末を案じて、プロ5年目のシーズン半ばに、就職活動めいたことを始めていたという。「高校の恩師や友人、プロ選手として広げた人脈...いろいろな人に最初は電話をしました...フルに活用しましたよ...恥も外聞も捨ててました...」と、引退前から次の人生へのステップとして、既に職探しに着手していた。「最後のシーズンの直前に怪我の手術をして...半年間はダメだと言われていましたから...クビになるのは感づいていました...」と5年目シーズンのはじめから引退を予期していたという。「はじめはショックだったけど...これからの人生の方が長いから...」と現役であることにはあまり拘らずに、新たな生活へ向けての取り組みを開始した。引退は「仕方がないこと...」と捉えていた。

現在の職場は、知人の紹介から入社して2年目になる。サッカーとは全く関係のない業種で、「この御時世にあって安定した業種...自分にとって一番不向きな職業だったけど...社会的ステイタスの高さにひかれた...運にも恵まれていましたね...」と満足のいく就職を果たしていた。しかし、「今も仕事のこと...全く分かりません...」と不満をもらす。最近、営業部への転属を命じられ、今までとは異なる仕事内容に戸惑いが

ちでもある。「生きてるって感じがしますよ...それなりに忙しいですし...」と積極的に仕事をこなしてはいるが、「この先の身の振り方を今考えているところなんです...」という。

現在、婚約中であって「将来のことをよく考える」機会が多い。そのためか、今まで自分のやってきたサッカーと職務内容との間にギャップを感じるが多くなった。「やっぱり...スポーツ関係の仕事がしたくて...今までやってきたことと、今の仕事はつながっていない...」「サッカー関係の備品を扱う仕事に関わりたくて...とりあえず春までは、この会社の営業で勉強をさせてもらって...その先は、スポーツ関係の仕事に移ります...会社には内緒ですけど...」としていた。現状に対する満足度は「八割までは満足していない...これからのことがハッキリしていませんから...」としていた。

Aは、全国大会レベルでの経験がなかったことで、プロサッカー選手として行く末を不安に思うことがあった。従って、プロ選手として自信に満ちていたわけではなく、その道のりも順風満帆であったとは言い難い。Jチームに在籍した2年間は、実力差のある選手が同じポジションにいたために活躍する機会が全くなかった。そのために降格移籍を体験するが、このことに対しては納得していた。移籍先での活躍を期して取り組んだが、怪我を繰り返してしまい、その思いもままならない状況に陥った。これをきっかけに、徐々に引退を予期するようになっていく。最後のシーズン半ばからプロ選手以外のアイデンティティを模索し始め、引退を迎えた時には、既に、サッカーとは全く関連のない職業に就くことが決定されていた。現在、その仕事への不満を持ちつつも、傾倒している。なぜならば、近い将来、スポーツ関連の業種に転職したいとする希望をもっているためと思われる。

予期を伴って引退し、現在の仕事に就いた背景には、怪我をきっかけにして、様々な役割実験を試みたことがうかがえる。また、このようにして、引退への準備を比較的早期に開始したことが、引退後の生活への移行を比較的スムーズにさせたとも考えられる。しかし、婚約を契機に、サッカー選手としての生き方と今の仕事との間に、ある種のギャップを感じはじめた。現在、両者を「つないでいく」、つまりはアイデンティティに連続性や一貫性も持たせるといった課題に直面しているといえるだろう。従って、引退を予測し、比較的早期に準備を行い、新たな生活への移行をスムーズに果たしたとしても、その後に大きな課題を残してしまうことをここでは確認できた。Aは、この課題に対して、現在、積極的に取り組んでいるといえるだろう。

## 2) 再教育の場を求めた元Jリーガー

事例B：30歳・既婚・17年間継続・引退後1年経過・大学院生。

Bは、大学卒業と同時にJチームに所属し、コーチとの不和が原因で戦力外扱いとなり、他のJチームに移籍する。その後、JFLチームへ移籍し、1年後引退を迎えた。現在は、大学院に所属し、指導者としての勉強を重ねている。

「兄に負けたくない...」との気持ちが強く、小学3年生の時に、2つ年上の兄が既にやっていたことからスポーツ少年団に入った。両親は、「習字もそろばんも、兄がやっていたので...」と、なにかと2人に同じことをさせるようにしていた。2人揃って、高校の進路先までは同じ経路を辿り、中学、高校と県代表選手にも揃って選ばれたこともある。Bは、「将来は体育の教師になって、サッカーの指導をする...」ことをこの頃から目指していたという。

大学進学は、サッカー名門校であることはもちろんのこと、「将来、故郷で教員になりたい...」という希望から、教員養成課程を有する大学を優先して選定した。大学生活の中では「サッカー部員」という肩書きをととても意識していたという。「5時まで授業を受けて...それから練習をするのに...生活の中でサッカー部員であることが常について回っていた」と当時を振り返る。また、同期生の中には日本代表選手として活躍している者もあり、彼らと比較されることも多くあった。しかし、「いや僕はやっぱり劣る...だから、指導者として彼らよりもすごくなりたい...」と思っていた。

大学卒業後には「サッカー指導者になりたい...」という希望を持つようになっていた。そのために、4年次には大学院への進路を予定していたが、「実業団にチャレンジしてみろ...」という恩師の薦めから、大学卒業と同時に実業団チームに入団した。入団1年後にJリーグが発足し、Bの所属するチームはJチームとなった。最初の2年間は、常に第一線で活躍し、チームの要としての役割を果たした。「俺以外に、試合にずっと出ているチームメイトはいない...俺は信頼されているんだ...」と自信を持つようになった。しかし、3年目のシーズン始めに、負けた試合の采配についてコーチと口論になり、その後は、試合に出る機会を奪われてしまう。「フェアーだと思ったので...全てを（コーチに）ぶつけたら...結局、受け入れてもらえなくて...」と、その後は公式戦への出場は一度たりともなかったという。

3年目のシーズン半ばには、「何で出れないんだ...やってられない...」と試合に出場できない悔しさから、故意に練習時間に遅刻したり、練習態度が怠慢であったり、コーチの進めるチームづくりに対して批判的な態度を示した。結局、シーズン終了時に、戦力外通告を受けることとな



る。「(戦力外を)予測していましたから...ショックはありましたけど...直ぐに切り換えて移籍先を探しました」としていた。その2週間後に、他のあるJチームから移籍のオファーを受けた。「Jチームであれば何処でも良かった...あのコーチを見返してやりたかった...」という思いから移籍先を決定している。

その意気込みとは裏腹に、移籍先では入団直後にサテライト(2軍)にまわされた。「移籍したときに、丁度、その監督も交代してしまって...僕を呼び寄せてくれた監督がいなくなっていた...」「新しい監督が抱く選手像と僕とは違っていたみたいで...直ぐにチームの構想から外された...」と、そこでも公式戦での出番は一切なかった。「納得いかない...まだまだやれるんだ、俺は...」とシーズン半ばから移籍先を積極的に探し始めた。しかし、次の移籍先には格下のJFLチームを望んだ。「体力的にも辛かったし...試合に出ていないから、明らかに実力が落ちていた...」ことがその理由であった。この時の移籍を「サッカー選手としての新たな門出」と捉えていた。

2度目の移籍先では、Jリーグでの経験とベテランということが見込まれて大いに活躍の機会を与えられた。どんな試合にもフル出場し、満足がいく競技生活に戻ったが、「疲れやすくて...監督の要求に応えられない...余裕がなくて...情けない」と思うことが多くなったという。移籍後、身体が思い通りに動かなくなっていることに気づき、直ぐに引退を想起し始めた。そして、「指導者になりたい...」という希望が再燃していく。「このまま選手を続けても...そのうち必ずやめる時が来る...」「今のままでは、指導者になっても何も蓄積がないから...ダメだ」と思い立ち、練習の合間を縫って指導者になるための勉強を始めた。大学院への進学を再度志望したのも、「いい指導者になるためには...いろいろな知

識を持っていることが肝心...」との判断からである。そして、引退を迎える。このことに対しては、「いい指導者になるための新しい一歩」と肯定的に捉えていた。

現在は、大学院で指導者としての勉強に励んでいる。「これからいろいろなことを学んで...近い将来、必ず素晴らしいサッカー指導者になりますから...」と意気込んでいた。「でも、困ることもあるんです...今何やってるの?って(昔のチームメイトに)聞かれると...大学院生ってなかなか説明しても分かってもらえないじゃないですか...」と今の自分の立場に戸惑うこともある。しかし、「全ては、修行の身...今に見てろよって感じですね...」と、将来の目標へ向けて、積極的に取り組む毎日を送っていた。

Bは、指導者になりたいという目標へ向けて現在取り組んでいる。彼のプロ選手としての生活も、その目標の一環として位置づけることができるだろう。2回にわたる移籍は、スタッフとの不和やチーム構想との不一致ということが引き金となっているが、突然、移籍を勧告されたわけではなく、それなりの準備期間があったとみて取れる。次の新しい生活へ向けての準備がなされていることから、現在の取り組みへの移行もスムーズで、現在、目標へ向けて着実に歩んでいる感がある。

### 3) アルバイトで生計を立てている元Jリーガー

事例C：男性・29歳・未婚・サッカー14年間継続・引退後1年経過・出版社の編集アルバイト。

Cは、大学卒業と同時にJFLチームに入団し、2年間在籍する。その後、Jチームへの昇格移籍を果たし、2年間の在籍の後、地域リーグチーム(アマチュアチーム)に移籍をする。その数カ月後に引退を迎

えた。現在は、出版会社の正式社員としてではなく、編集のアルバイトをしながら生計を立てている。

『あなたの今の生活について、どのように思うか』と尋ねたところ、「大学卒業までのサッカー人生が最高でした...」と答えていた。高校進学は、当時、県下で最も強いチームの学校を選んだ。「高校生の頃は、サッカーだけをやりて学校に行っていましたね...」としているように、当時の生活が競技中心であったことは言うまでもない。3年連続して高校選手権に出場し、3年生の大会では優秀選手賞を受賞する。「常にレベルの高いサッカーを志向し、それに見合う行き先を選定してきた」という。もちろん、大学進学もサッカー名門校への進学を希望し、入学する。

いつの頃からか「プロ選手になることが夢」としていたが、「高校を卒業して直ぐにプロになろうとは思わなかった...大学に進むのは当たり前...」と当時は考えていた。大学進学後、3年生の時に本人の貢献から、大学選手権での優勝を経験した。その活躍を評価され、4年生の時には、「いいものを持っている。うちのチームに入る気はないの?」と、プロチームのスカウトマンに声をかけられたこともあった。大学4年の秋、卒業を間近にして、JFLチームからオファーを受ける。「Jチームで活躍したいけど...まずは、JFLから...」と迷わず入団を承諾した。そして、JFLに在籍して2年が経過しようとしていた頃、あるJチームからの入団依頼を受ける。「すごく嬉しかった...夢でしたからね...」リーガーになるのが...」と、その時のことは今でも鮮明に覚えているという。

こうしてJFLチームからJチームへの昇格移籍を果たすが、実のところ、いずれも第一線で活躍する機会には恵まれていない。次第に「自分の考えることと、スタッフが考えるサッカーが違う。どうして...」と悩むことが多くなっていく。このことから、スタッフへの信頼感が薄れ、

投げやりな態度で練習に臨むこともしばしばみられるようになっていった。また、怪我も多く、試合に出れるチャンスを逃すことも多かったようである。

Jチームに移籍して1年目の夏、合宿中に右膝を捻挫してしまう。その後は、「早く怪我を治して...復帰したい...」と思い、懸命にリハビリに励んだ。しかし、その後も何度となく怪我を再発してしまう。「怪我ばかりしているからプロ失格だな...」と半ばあきらめ気分も出てくるようになっていった。相次ぐ怪我にスタッフとの不和が重なり、いつの間にか「サッカーへの意欲が薄れてしまっていた...」という。

その後、2年目のシーズン終了と同時にJチームを自由契約となる。「プロとしての実力に欠ける...」とのフロント側の戦力外通告に対して、「怪我ばかりしていたから仕方がない」と、とりあえずその場では納得してみせた。しかし、「30歳くらいまではまだプロ選手としてプレーできるだろう」と、本人の中ではまだプロ選手としてやっていく気持ちが残っていた。その気持ちとは裏腹に、漠然とではあるが「プロをやめたら教師になるか、あるいはプロで貯めたお金を使って、何か事業を興せばいいや」と考えることもあった。しかしながら、「教師になるにも事業を興すにもそれなりの修業が必要なことは分かっていた。だけど当時は何もする気が起こらなかった」と、それに対して具体的に取り組み、模索することは一切なかったという。

戦力外通告を受け、悶々とした生活を送る中で、「そろそろ引退してもいいかな...でも、もう一度どこか(のチーム)でやれないかな...」と考えるようになっていった。その1ヶ月後、地域チームへの移籍依頼を受けた。そのチームはJFLへの昇格を強く目指しているアマチュアチームであり、「昇格に向けて俺を必要としてくれている...プロじゃないけ

ど...やってみるか」と決心した。そのことについては、「消えかけていたサッカーへの情熱を再び取り戻した感じ...」と振り返る。そして、移籍を決意した1週間後に正式に解雇通達を受け、新天地へと向かっていった。その時の移籍については、「サッカーを続けるという意味ではサッカー選手にとって幸せなこと」と捉えていた。

意気揚々として移籍してはみたものの、なかなか思うようにいかない。「プロ選手ではなくなったので...」と、以前に比べ練習や試合などの競技環境に不備が目立つ。「準備も自分でやらなければならない...試合も観客が少なくて...いやになっちゃう...」と知らず知らずのうちに愚痴も増えていったという。しかし、チームはJFL昇格といった目標へ向けて、より一層取り組みを強化していった。そして、昇格のためには落とすことが許されない重要な試合に出場するが、敢えなく惨敗を喫した。この時に昇格の夢が断たれたことで、自分の行く末について急に考えるようになったという。「このままサッカーをやっていてもいいのかな...今までサッカーばかりやってきたけれども...何か違うぞ...」と思うようになった。「30歳で引退してゼロから始めることを考えると...今が潮時かな...急がなくちゃ...」と引退を決意し、直ぐに新たな一步を踏み出した。27歳のことである。そこでの引退は自分にとって「進歩でも後退でもなく、今までの自分は死んで...またこれから違う人生を始めるきっかけ」と捉えている。

引退直後に、知人の紹介で、出版社の編集でアルバイトを始めることとなる。それから1年が経つ。「いずれ正社員になると思うんだけど、先のことは全く分かりません...」「今後、やりがいが少しでも出てくるように、今の仕事を頑張ろうとは思いますが...果たして続けていけるかどうか...」と今後の生活についての不安をのぞかせていた。「先のこと

を考えると不安で仕方がない...だから...僕はこのままでいればいいと思う...」と消極的な態度を拭い去ることができず、現状において妥協している感を受ける。

Cにとって、プロ選手になるという夢の実現は、プロ選手としてのアイデンティティを獲得することとなった。しかし、それは束の間であり、その後、戦力外通達から「プロ選手としての自分」を捨てざるをえなかった。アマチュアチームに移籍するものの数ヶ月後に引退を迎えている。

移籍については「サッカーを続けるという意味ではサッカー選手にとって幸せなこと」と捉えており、2回の移籍体験は本人にとって肯定的な意味を含んでいたようだ。一方、引退は、「進歩でも後退でもなく、今までの自分は死んで... またこれから違う人生を始めるきっかけ」というように、自分にとって両面的に捉えていた。

「サッカー選手でない新しい自分」を求めて既に新たな社会生活を始めている点では、アイデンティティ再体制化の渦中にある事例と捉えることができる。しかし、現在の取り組みにおいては消極的で妥協している感を拭えない。プロサッカー選手であったことと現在の生活とのつながりにおいて、連続した意味づけが未だなされていないこともうかがえる。そういったことを踏まえると、本事例は、現状において少なからず不適應状態にあるといえよう。特に、「今後、やりがいが少しでも出てくるように、今の仕事を頑張ろうとは思いますが...果たして続けていけるかどうか」と、将来を見通したときに少なからず困難さを感じている。このことから、今後、更なる模索が必然的に生起するのではないかと予測された。

## 2 討 議

ここでは、前述の3事例についての討議を行う。

まず、3事例に共通するのは、いずれもJチームからJFLチーム、もしくはJチームから地域チーム、といった降格移籍を体験していたことである。このことについて、事例Aは「次のチームで活躍できるチャンス」、事例Bは「サッカー選手としての新たな門出」、事例Cは「サッカー選手にとっては幸せなこと」とそれぞれ捉えており、いずれも降格移籍が自己にとって肯定的なイメージを有していた。一方、引退に対しては、事例Aは「仕方がないこと」と中立的なイメージを、事例Bは「いい指導者になるための新しい一歩」と肯定的なイメージを、事例Cは「進歩でも後退でもなく…」と両価的なイメージを有していた。

これらの内容から、彼らがそれまで所属していたチームに比べて格下のチームに移る降格移籍は、サッカー選手としての新たな活躍の機会を得られるとあって肯定的な意味合いを有しており、「サッカー選手としての自分」を維持していくためには避けがたい選択であったことがうかがえる。

一方、事例Aと事例Bにとって、そのような体験は自身の競技引退を現実的な問題として受け入れていく内的作業を含んでいたと考えられる。彼らは移籍後間もなく、引退後の生活についての見通しを立て、その実現へ向けての具体的な取り組みを開始していた。これによって、引退後の生活へ比較的スムーズに移行しており、調査時に、事例Aは「スポーツ関連の業種」、事例Bは「いい指導者」といった将来の自己像へ向けて建設的な取り組みの最中であつた。

他方、事例Cは移籍先へ傾倒するがあまり、予測もしなかつた敗北体験をきっかけに、突如として「サッカー選手としての自分」の行く末に

不安を抱き始めている。そして、引退後の生活の準備を何ら行うことなく突然に引退を迎えた。現状に対して妥協的な取り組みに止まっているのは、今後の方向性や見通しを未だ明確にしていなかったためと考えられる。

このようなことを踏まえると、プロサッカー選手にとっての降格移籍体験は2つの意味を有するといえる。つまり、移籍体験は、「サッカー選手としてのキャリアを継続させるためには避けられない生活構造の転換である」ということと、もう一方は、「いずれ必ず直面する引退への準備に影響する体験である」ということである。

次に、引退後の準備を早期から始めることが引退後の生活へのスムーズな移行に寄与することも確認された。移籍体験がきっかけで模索が開始され、その結果、引退への方向づけがなされた場合、次の人生への取り組みにも比較的早期から取りかかれることになる。事例Aと事例Bの場合、調査時に模索の最中にあることがうかがえ、両者は自らが定めた方向へ具体的に取り組んでいたといえる。その模索の中では「サッカー選手としての取り組みと引退後の生活への取り組みに何らかの連続性や一貫性を持たせる」ことが大きな課題となっていた。事例Aの場合であれば「スポーツ関連の業種」、事例Bの場合であれば「いい指導者」といった将来の自己像とこれまでの「サッカー選手としての自分」に「つながり」を持たせようと積極的に取り組んでいることがうかがえる。一方、事例Cについては、敗北体験から突如として引退を決意し、将来の見通しを持たないまま新たな生活を開始しており、当面、「これまでの自分」と「これからの自分」とつないでいく内的作業が求められることになるであろう。つまり、引退までの取り組みと引退後の生活への取り組みにおいて連続性や一貫性を有することが、引退後の適応に対する重要な課題であるといえるだろう。



## 第5節 本章のまとめ

本研究では、プロサッカー選手のキャリア移行の実態を明らかにしてきた。まず、フロント側の立場と現役プロ選手の立場からアプローチし、移籍や引退の実態を明らかにし、次に、現役プロサッカー選手の移籍に関連して生起する問題を明らかにした。特に降格移籍を体験したプロサッカー選手には深刻な問題が認められた。そして、キャリア移行を体験した元プロサッカー選手の事例を通じて、彼らがキャリア移行に伴って体験する問題にどのように直面しているのかを検討した。

フロントから得られた研究資料を基に、以下のようなことが明らかになった。

① 平成5-8年度シーズンのキャリア移行については、4シーズンを通じて、各チーム毎に約20名前後の移籍者と約10名前後の引退者を出していることが確認された。

② チームに貢献した者は、高い競技水準のチームに移籍できた者が多く、一方、チームに貢献できなかった者は、降格移籍を体験していた者が多かった。

③ 引退した者は、チームへの貢献度が低い者が多く、望むと望まざるに関わらず引退を迎えており、そのことには満足していた者が多く、一方、引退時にチームへの貢献度が高い者は、自らの希望から満足した形で引退を迎えていた者が多かった。

次に、現役プロサッカー選手から得られた研究資料を基に、以下のようなことが明らかになった。

① 年長者になればなるほど、移籍を体験するプロサッカー選手が多く、また、プロサッカー選手にとってJFLチームからJチームへ、ま

た、Jチームから他のJチームへ移籍することが困難な状況にあった。

② プロサッカー選手にとって移籍は、概して肯定的なイメージで捉えられていた。

③ 降格移籍は、移籍後の状況への傾倒を余儀なくし、その後の見通しを立てにくくさせている。

次に、キャリア移行を体験した元プロサッカー選手の事例からは、以下のようなことが確認された。

① 降格移籍体験は、サッカー選手としてのキャリアを継続させるためには不可避な生活構造の転換であり、いずれ必ず直面する引退への準備に影響する体験であるともいえる。

② 引退後の準備を早期から始めることは、引退後の生活へのスムーズな移行に寄与する。

③ 引退までの取り組みと引退後の生活への取り組みにおいて連続性や一貫性を有することは、引退後の適応において重要な課題となる。

このように、本章では、特に、プロサッカー選手の降格移籍に注目し、その機能やそこでの課題を検討してきた。彼らにとって降格移籍は、プロサッカー選手としてのキャリアを維持するための避けがたい生活構造の転換であり、その移行体験は、予め準備することによってスムーズに果たすことができ、また、そこでは、プロサッカー選手としての自己と将来の自己とをつないでいくこと、つまりは、連続性や一貫性を持つことが引退後の適応へ向けて大切な課題であることが確認された。